



さくらみ川

第五四号 平成十七年七月十五日
熱日高彦神社 社務所
電話 〇二二四・六二一・〇二四一
<http://hitaka.org> atuhitaka@hitaka.org

8月5日は夏祭り

薪神楽

紙とろうろう

打上げ花火

期日 平成17年8月5日(金)
日程 午後1時半 紙とろうろうけいよう

3時 触れ太鼓

5時 紙とろうろう火入れ

6時 祭典

神賑行事

巫女舞 神楽など

8時半 打上げ花火 終了

奉納 巫女舞(地元女子)

神楽(神楽会・こども神楽)

紙とろうろう(枝野小学校児童)

枝野幼稚園児

角田養護学校児童

はぐくみ学園利用者

紙とろうろう奉納希望者)

奉仕 有志会によるふるまい

生ビール 焼き鳥 かき氷など

※打上げ花火の奉納を承ります 一発3千円

各区総代または社務所まで

六十年目の終戦の日は 戦没英霊に参りましょう

大東亜戦争終結六十年の今年は、日本海海戦、日露戦争終結百周年にも当たります。国と国民のために戦って亡くなった御霊の前に感謝のまことを捧げましょう。

御霊は「英霊」と讃えられ、枝野では熱日高彦神社の前の丘「忠魂碑」に、角田市とし



ては角田児童館前の「忠霊塔」に、県は仙台の宮城縣護国神社に、国では靖国神社に祀られています。もちろん家々では仏壇などの御霊屋に祀られています。特別にこのような施設があるのは、自分の命的ときながら国のために戦うことを命じられ、私達のためにやむを得ず亡くなってしまった方々だからです。

ところで、前述の二つの戦争の結果はまるで違いますが、よその国と戦争をしたこと、国を護るための要員として多くの人が命が戦いに参加し、その中の多くの人が命を落とし、或は傷付き、飢えや病に苦しんだことは共通することであります。

もちろん六十年前の大東亜戦争は敗戦で、空襲などの戦禍の後占領軍が駐留するといふ、未曾有の結果であったため大変混乱し、その混乱が今も私たちの生活や思想の上に大きな影を残しております。いま戦争責任、A級戦犯など話題が錯綜していますが、その論議は別として、私達の生活のために、戦いに参加するよう命ぜられてあえなく倒れてしまった郷土の英霊に感謝のまことを捧げることは、誰も妨げることは出来ません。そしてするかしないかはただあなたの一存だけです。

イラクの状態を見てわかるように、占領軍は何時テロに遭うか恐れつつ日本に乘込

んで来たのです。しかし日本ではまことに従順に占領政策に従いました。憲法改正も極東軍事裁判も、神道指令のような思想操作も、教育さえも、道理か理不尽かを問わず、或はそれを先取りして、連合国(戦勝国)のいい子になって来ました。

その結果戦勝国が狙ったとおり、国論がばらばらでまとまらず、政治家や財界がよその国に追従して、今日のような天皇陛下の靖国神社参拝どころか、首相参拝さえも注文付けられるような状態を招いてしまったのです。小泉首相が今年もしっかりと靖国参拝されることを祈りつつ、私もあなたもしっかりと忠魂碑に、忠霊塔にお参りしましょう。

慰霊祭

忠魂碑にて 八月十五日

午前九時から

忠霊塔にて 八月十五日

正午から

社頭あれこれ

八十八夜に豊作を祈願

子眉嶺神社例祭齋行

五月二日、八十八夜のお祭りが、お世話の方や氏子、崇敬者参列のもと斎行された。数年休みとなっていた島田地区もお世話人のご努力で復帰し、直会も一段とにぎやかに。それでも「こんないいお祭りだったらもつと誘ってくればよかった」との声しきり。遅咲きの山桜が散る中、出たての山菜料理に舌鼓を打った。

また前日の日曜には、石川口の大森会が八十八夜に合せ大森山に環境登山を行った。



春の野を神輿駆ける

春祭り無事斎行される



ようやく春を迎えた四月六日、春季例大祭が斎行された。桜の花こそ咲かなかったが、あたたかな陽気のなか祭典、神輿渡御ともつつがなく執り行うことができた。特に神輿渡御については、平日斎行で人数もじゅうぶんとは言えない中、最後まで立派にご奉仕いただいた。関係者、奉仕者をはじめ、皆様に感謝申し上げます。

世話人反省会で課題を議論

平日斎行を二年経験し、課題も見えてきた。六月五日には総代、世話人が集い反省会を持った。中学生や高校生、女子生徒まで参加し、次世代への継承がうまくいきそうだという意見の一方、平日は人数が集まらず参加した若者に大変な印象を植え付け逆効果だ、皆で参加してこそ祭りでは、といった声も上がった。課題と向き合いながら、いい伝統がつけられるよう工夫、努力していくことを申し合わせた。

~~~~~まほろば~~~~~

### イグネ（屋敷森）

#### いまイグネは厄介物

古い家のたたずまいとして、イグネと称する屋敷森は欠かせないものであった。今そのイグネが伐採される傾向にある。

それは屋根が萱葺きから瓦やトタンに替り、土壁が建材に替わったことによって、家屋が雨風から十分に耐えられるため、森の助けが要らなくなったからという。そういえば都会のビル風などは蔵王嵐よりひどいこともあるというのに森を持たないで過ごせるのだから、同じ構造を持つ当地の新しい建築物だって森の助けは無用ということになる。宅地開発された住宅ももちろん森無しだ。

もう一つ伐採の理由に落ち葉などの問題がある。

樹種によって落葉の時期は違うが、落ち葉の季節は必ずある。その始末が厄介なのである。かつて暖房も炊事、風呂焚きも焚き火に頼った頃、落ち葉や枯れ枝は薪や炊き付けとして重宝されてきた。ほんのつい最近電気や化石燃料に入れ替わったため、途端に厄介物に陥ってしまった。殊に家並みが混んでくると、その落ち葉などが隣家に飛んできて嫌われたり、台風で倒れたりしたら、好みの域を超えて人身問題にさえなる。マインスの可能性を探すと、厄介物と言えない。

もう一つ、イグネは建替えの材料として育てておく方が有利であった。しかし今、伐採と製板を加えると買った方が安価で美しい。いよいよ無用の長物になったようだ。

### イグネは祖神往来の目印

では、この屋敷森イグネはそうした風除けといった物理的な作用のためだけに作られていたのだろうか。思い出してほしいことがある。それは十四、五年前まで正月飾りを納めたところはどこだっただろうか。

明の方の樹木であったり、屋敷神の所の樹木であったり、そこに結んで小豆粥を添えてお送りしたのである。何れも屋敷の回りの樹木であった。

毎年毎年送るため、辺りに樹木が無ければならず、そのように神を送る木は滅多に伐れることも慎まれてくる。そしてその木が大きくなればなる程屋敷の風格が出来て、遠くから見ても、あれは何



処その何某の家だと判るようになってくる。

実はそれを目印にしたのは人だけではない、是を懐かしんだ先祖の霊である氏神（産土神）うぶすながみこそ是を頼りにされると思われてきた。屋敷神の祠を作ったのは後のことで、この屋敷の木こそ祖先の霊たちの往来の道筋だったのである。正月、春秋の祭、彼岸やお盆、当り日の霊、農作業のサナブリ（早苗饗）等に天路を通過して降り立つのがこの屋敷森だと考えられていた。そのときには宿られる木を新しく正月は松、お盆は柳や盆花、祭には青竹や幣束、あるときは菖蒲や椿等その季節の美しい植物を準備してきた。おいでになる神様を美しく迎える心である。

よく見てみると、一般に屋敷森は主に北西方向に厚い。日本の荒風は北西から吹くことが多い。是を防ぐために北西に木を植えたのであろう。そう考えて決して間違いではあるまい。しかし前段の話との関わり…。方位学によると、北西はイヌイ（乾）と言って神を祀るのに最適な方角とされてきた。なるほどその方角に屋敷神様が多く祀ら

れている。そして大きな樹木がそこに在るのである。言ってみれば屋敷森イグネは屋敷神様であり、神様、靈魂の通り道なのである。私たちもやがてこの路を往来することになるのであろう。

### せめて残したい目印の神木

近頃この屋敷森の伐採の相談や伐木祭、樹木を伐る時の祭の依頼がある。話の向きでは、多くはその木の「屋敷神様の樹」という神聖な役目は、明確に意識されていないことが多い。しかし、ただ伐るのにはどこか気が引けるという様子である。倒すときには隣や自分の家に掛からないように祈るという意識もある。それでも、そのこだわりからは、私達のDNAの中に、先祖からの、神聖な役目が組み込まれているように思える。

相談された家には「神木として残すこと、あるいは常緑の灌木などを替わりに植えること」をお勧めしたりする。屋敷神様はかつて一族の中心の家に祀られており、それが氏（一族）の神で、祭日には親類が集まって賑ったようである。三、四十年前までは、祭りに御呼ばれしてお膳でご馳走になった記憶を持っている人も多いであろう。血族中心からやがて地域集団中心の生活になり、お祭の神様が「氏神」から「村鎮守」に移行する中で、戦後の新生活運動も手伝って、この行き来さえなくなった。今は先祖の神様は、一族の神としてよりも家々の神として往来されるとするならば、家々のイグネはいよいよ大切な役目となってきたのではないかと思う。



お日高さんの自然⑭

## ドクダミ(葎草) (ドクダミ科)

ドクダミは中国から東南アジア、ヒマラヤまで分布するアジア東部の特産種である。日本各地の路傍や空き地、杉林などのやや日陰で湿ったところに群生する多年草で馴染みの深い野草の一つである。熱日高彦神社でも林縁に普通に見られる。今頃が丁度花時で白く目立つ。白い花びらのように見えるのは、じつは花びらでなく葉が変形した「苞」で、穂に集まる黄色っぽい小花には花びらもがくもない。

昔は多くの薬効を持つ薬草として重宝され「十薬」(十の薬効を持つという意味)とも呼ばれていた。生葉を火であぶって化膿傷のはり薬に、葉を揉んだ汁は虫さされや蓄膿症そして痔にも効くといわれている。



さらに、内科的にも効能があるとされている。薬としての効果の実感はないが、わが家では乾燥した全草をドクダミ茶として利用している。花時が採集のチャンスである。

このように多くの薬効があるので「毒にダメを押す」という意味で「ドクダミ」の名がついたといわれている。葉はゆでて飲みそ和えに、生のままてんぷらに、そして地下茎はゆがいて煮物にと自然食としても利用できる。

さて、ドクダミというところの独特な臭いである(熱によって臭みがなくなるが)。この臭いの正体はデカノイルアセトアルデヒドという揮発性物質である。二日酔いの嫌な臭いのアセトアルデヒドに似て、もう少し複雑な構造の化学物質である。最近この物質にはカビや細菌の増殖を抑える働きがあることがわかってきた。ドクダミの葉で冷蔵庫を拭けばカビ退治ができるし、細菌が関与する冷蔵庫臭もすっかり消えることまちがいないというところか。昔の民間療法も、抗菌効果も経験的に応用していたわけ、科学的根拠があることが証明されたと言える。

植物にはさまざまな臭いがあるが、彼らが生き延びるためにそれぞれ重要な役割があるであろう。いつもながら自然の神秘と植物たちの生命力には感服する。他に、一

つの例として園芸植物のマリーゴールドがある。この植物のきつい臭いの成分には植物を害するネマトーダ(根瘤線虫)を殺す働きがあるといわれている。ダイコンの有名な産地である三浦半島ではダイコンの畑に混じってマリーゴールドの畑も見られる。

どこにも見られるドクダミ。しかも今は花盛り、身近な薬草として大いに利用したいものである。(文/小島和夫氏)

## 年中行事を楽しもう

## 七夕(たなばた)

七夕は食物の成長を感謝する収穫祭と、お盆に棚機女と呼ばれる娘が御霊の衣類を織り棚に備え、村の穢れを祓うという二つの行事に由来しています。これに大陸から織姫と彦星の「星まつり」と、織姫にあやかり裁縫の上達を願う行事が合さって現在のようになかたちになりました。当地の七夕行事は旧暦に行われます。



## 事業だより

## 愈々境内整備・社殿修復事業に着手

氏子の皆様のご理解を賜り、熱日高彦神社修繕事業は、検討の段階からいよいよ実施へと動き出しました。四月に第一回の会議を開き実行組織として神社関係者から成る「事業委員会」を立ち上げました。

## 〈事業委員会構成〉

役員会 決定機関 宗教法人役員で構成

総務部会 (総務・祭典・会計)

全体会 — 施設整備部会 (社殿設備)

環境整備部会 (境内整備)

顧問会 各区長に就任いただき助言いただく

氏子崇敬者からの貴重なご意見をふまえながら、六月にはあらためて現状をつぶさに検分しております。また、現在各区総代が氏子宅を訪問し、ご寄付のお願いをさせていただいているところです。



今後、事業案を精査し、作業工程などの計画をたて、着実に実施に移せるよう進めてまいります。ご協力のほどよろしくお願いいたします。

◆◆◆ ご奉納・ご奉仕 ◆◆◆

各区 神社総代各位 春季例大祭神饌

一区 佐藤 幸男さん 境内整備

一区 斎藤 勝二さん 境内整備

一区 斎藤 實さん 野菜

一区 斎藤 公一さん 野菜

一区 只野 吉次さん 野菜

一区 佐藤 雅邦さん 野菜

一区 山家 隆さん 境内整備

一区 木幡 市郎さん 野菜

一区 赤坂 誠さん 野菜

一区 赤坂 敏栄さん 野菜

一区 赤坂 昭海さん 野菜

一区 斎藤 まつ子さん 神輿装束縫製

二区 渡邊 郷司さん 金幣一式

二区 斎藤 仁さん 境内整備 神酒

二区 戸村 賢治さん 野菜

二区 門馬 幸寿郎さん 帚

二区 菅野 忠雄さん 神輿渡御写真

二区 門馬 忠夫さん 境内整備

三区 佐藤 善一さん 米 野菜 境内整備

三区 三品 久志さん 野菜

三区 酒井 貞八さん 野菜

三区 佐藤 勝征さん 境内林整備

三区 斎藤 武雄さん 魚

三区 小野 良雄さん 境内林整備

三区 戸村 巧さん 野菜

四区 佐藤 敏さん 野菜

四区 只野 忠春さん 野菜

四区 小形 一夫さん 神酒

仙台 小野 和久さん 神輿渡御写真

## 社頭暦

七月 一日 月次祭

一八日 海の日

八月 一日 月次祭

五日 神社例祭

七日 七夕祭り

一三〇一六日 祖霊祭

一五日 忠魂碑慰霊祭 (午前9時)

九月 一日 月次祭

一八日 中秋の名月

二三日 秋季皇霊祭 彼岸

編集後記 梅雨に入り神社の境内では雑草が爆発的に伸びます。山なので仕方ないのですけれど、

特にオオバコ、ヒメジョオン、ドクダミの丈夫さには閉口します。と、そんな折小島先生から原稿

を頂きました。「雑草という草はない」とは昭和天皇のお言葉ですが、まさにそのとおりですね。草

刈には林のドクダミを少し刈り残しました。丁度

今が盛り、摘んでいければきつとご利薬、いや

ご利益がありますよ。

(禰宜)